

声に出して読みましょう。

ゆきわた

### 雪渡り ②

みやざわけんじ  
宮沢賢治

## 雪渡り その二（狐小学校の幻燈会）

ゆきわた  
に きつねしょうがっこう げんとうかい  
青白い大きな十五夜のお月様がしずかに氷の上山から  
のぼ  
登りました。

ゆき あお ひか  
雪はチカチカ青く光り、そして今日も寒水石のように堅  
く凍りました。

しろう きつね こんざざらう やくそく おも だ いもうと  
四郎は狐の紺三郎との約束を思い出して妹のかん  
子にそつと云いました。

こんやきつね げんとうかい い  
「今夜狐の幻燈会なんだね。行こうか。」  
するとかん子は、

い  
「行きましょう。行きましょう。狐  
こんこん狐の子、こんこん狐の  
こんざざらう  
紺三郎。」とはねあがって高く叫ん  
でしまいました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

すると二番目の兄さんの二郎が

「お前たちは狐のところへ遊びに行くのかい。僕も行きたくないな。」と云いました。

四郎は困ってしまって肩をすくめて云いました。

「大兄さん。だって、狐の幻燈会は十一歳までですよ、入場券に書いてあるんだもの。」

二郎が云いました。

「どれ、ちょっとお見せ、ははあ、学校生徒の父兄にあらずして十二歳以上の来賓は入場をお断わり申し候、狐なんて仲々うまくやってるね。僕はいけないんだね。仕方ないや。お前たち行くんならお餅を持って行ってやりよ。そら、この鏡餅がいいだろう。」

四郎とかん子はそこで小さな雪沓をはいてお餅をかついで外に出ました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

きょうだい いちろうじろうさぶろう とぐち なら た  
兄弟の一郎二郎三郎は戸口に並んで立って、

い おとな きつね いそ め  
「行っておいで。大人の狐にあってたら急いで目をつぶるんだよ。そら僕ら囃してやろうか。堅雪かんこ、凍み雪しんこ、狐の子あ嫁いほしいほしい。」と叫びました。

つきさま そら たか のぼ もり あおじろ つつ  
お月様は空に高く登り森は青白いけむりに包まれていきます。二人はもうその森の入口に来ました。

むね しろ ちい きつね  
すると胸にどんぐりのきししょうをつけた白い小さな狐の子が立って居て云いました。

こんばん はよ にゆうじょうけん も  
「今晚は。お早うございます。入場券はお持ちですか。」  
も ふたり だ  
「持っています。」二人はそれを出しました。

きつね こ もっと  
「さあ、どうぞあちらへ。」狐の子が尤もらしくからだを曲げて眼をパチパチしながら林の奥を手で教えました。

はやし なか つき ひかり あお ぼう なんぼん なな な こ  
林の中には月の光が青い棒を何本も斜めに投げ込んだように射して居りました。その中  
ち ふたり き  
のあき地に二人は来ました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

見るともう狐きつねの学校生徒がっこうせいとが沢山集たくさんあつまって栗くりの皮かわをぶつ  
つけ合あったりすもうをとったり殊ことにおかしいのは小ちいさな  
小ちいさな鼠ねずみぐらい位の狐きつねの子こがおおきいのは小ちいさな  
小ちいさな鼠ねずみぐらい位の狐きつねの子こがおおきいのは小ちいさな  
子供こどもの狐きつねの肩車かたぐるまに乗の  
ってお星様ほしさまを取とろうとしているのです。

みんなの前まえの木の枝えだに白しろい一枚いちまいの敷布しきふがさがが  
つていま  
した。

不意ふいにうしろで

「今晚こんばんは、よくおいででした。先日せんじつは失礼しつれいいたしました。」  
という声こえがしますので四郎しろうとかん子ことはびっくりして振り  
向むいて見ると紺三郎こんざぶろうです。

紺三郎こんざぶろうなんかまるで立派りっぱな燕尾服えんびふくを着きて水仙すいせんの花はなを胸むね  
につけてまっ白しろなはんけちでしきりにその尖とがったお口くちを  
拭ふいているのです。

四郎しろうは一寸ちよっとお辞儀じぎをして云いいました。

「この間あいだは失敬しつげい。それから今晚こんばんは  
ありがとう。このお餅もちをみなさんで  
あがって下ください。」

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

狐きつねの学校生徒がっこうせいとはみんなこっちをみ見えています。

紺三郎こんざぶろうは胸むねを一杯いっぱいに張はってすまして餅もちを受けとりまし  
た。

「これはどうもおみやげいただを戴すいて済みません。どうかごゆ  
るりとなすって下ください。もうすぐ幻燈げんとうもはじまります。  
わたくし ちよつとしつれい

私わたしは一寸失礼ちよつとしつれいいたします。」

紺三郎こんざぶろうはお餅もちを持って向むこうへ行きいました。

狐きつねの学校生徒がっこうせいとは声こえをそろえて叫さけびました。

「堅雪かたゆきかんこ、凍み雪しゆきしんこ、硬かたいお餅もちはかたらこ、白しろ  
いお餅もちはべつたらこ。」

幕まくの横よこに、

「寄贈きぞう、お餅沢山もちたくさん、人ひとの四郎氏しろうし、人ひとのかん子氏こし」と大おおきな  
札ふだが出でました。狐きつねの生徒せいとは悦よろこんで手てをパチパチ叩たたきまし  
た。

その時じピーふえと笛なが鳴なりました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

紺三郎こんざぶろうがエヘンエヘンとせきばらいまをしながら幕まくの横よこから出て来て丁寧ていねいにお辞儀じぎをしました。みんなはしんとなりました。

「今夜こんやは美しい天気てんきです。お月様つきさまはまるで真珠しんじゆのお皿さらです。お星ほしさまは野原のほらの露つゆがキラキラ固かたまったようです。さて只今ただいまから幻燈会げんとうかいをやります。みなさんは瞬またたきやくしやみめをしないで目をまんまろひらに開みいて見くていて下ください。

それから今夜こんやは大切な二人ふたりのお客きやくさまがありますからどなたも静しずかにしないといけません。決けつしてそつちの方かたへ栗くりの皮かわを投げたりしてはなりません。開かい会かいの辞じです。」

みんな悦よろんでパチパチ手てを叩たたきました。そして四郎しろうがかん子こにそつと云いいました。

「紺三郎こんざぶろうさんはうまいんだね。」

笛ふえがピーと鳴なりました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

『お酒をのむべからず』大きな字が幕にうつりました。そしてそれが消えて写真がうつりました。一人のお酒に酔った人間のおじいさんが何かおかしいな円いものをつかんでいる景色です。

みんなは足ぶみをして歌いました。

キックキックトントンキックキックトントン

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんじゅうはぼっぼっぼ

酔ってひよろひよろ太右衛門が

去年、三十八たべた。

キックキックキックキックトントントン

写真が消えました。四郎はそっとかん子に云いました。

「あの歌は紺三郎さんのだよ。」

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

べつ しゃしん  
別に写真がうつりました。一人のお酒に酔った若い者が  
ほおの木の葉でこしらえたお椀のようなものに顔を  
な た  
んで何か喰べています。紺三郎が白い袴をはいて向うで  
み  
見ているけしきです。

あしぶ みた  
みんなは足踏みをして歌いました。

キックキックトントン、キックキック、トントン、

し ゆき かたゆき  
凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

のはら  
野原のおそばはほっぽっぽ、

よ  
酔ってひよろひよろ清作が

きよねんじゆうさん た  
去年十三ばい喰べた。

キック、キック、キック、キック、トン、トン、トン。

しゃしん き ちよつと  
写真が消えて一寸やすみになりました。

かあい きつね おんな こ きびだんご さくら ふた  
可愛い狐の女の子が黍団子をのせたお皿を二つ  
も  
持って来ました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

四郎しろうはすっかり弱よわってしまいました。なぜってたった今いま太右衛門たえもんと清作せいさくとの悪いわるものを見知らしないで喰たべたのを見みているのですから。

それに狐きつねの学校生徒がっこうせいとがみんなこつちを向むいて「喰くうだろうか。ね。喰くうだろうか。」なんてひそひそ話はなし合あっているのです。かん子はこはずかしくてお皿さらを手てに持もったままっ赤かになってしまいました。すると四郎しろうが決けつ心しんして云いいました。

「ね、喰たべよう。お喰たべよ。僕ぼくは紺三郎こんざぶろうさんが僕ぼくらを欺だますなんて思おもわないよ。」そして二人ふたりは黍団子きびだんごをみんな喰たべました。そのおいしいことは頬ほっぺたも落おちちそうです。狐きつねの学校生徒がっこうせいとはもうあんまり悦よろこんでみんな踊おどりあがってしまいました。

キックキックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひひかり

よるはツンツン月つきあかり、

たとえからだを、さかれても

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

狐きつねの生徒せいとはうそ云いうな。」

キック、キックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとえこごえて倒れても

狐の生徒はぬすまない。」

キックキックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとえからだがちぎれても

狐の生徒はそねまない。」

キックキックトントン、キックキックトントン。

四郎もかん子もあんまり嬉しくて涙がこぼれました。

笛がピーとなりました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

『わなを軽べつすべからず』と大きな字がうつりそれが消えて絵がうつりました。狐のこん兵衛がわなに左足をとられた景色です。

「狐こんこん狐の子、去年狐のこん兵衛が左の足をわなに入れ、こんこんばたばた

こんこんこん。」

みんなが歌いました。

四郎がそつとかん子に云いました。

「僕の作った歌だねい。」

絵が消えて『火を軽べつすべからず』という字があらわれしました。それも消えて絵がうつりました。狐のこん助が焼いたお魚を取ろうとしてしっぽに火がついた所です。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

狐きつねの生徒せいとがみな叫さけびました。

「狐きつねこんこん狐この子こ。去年きよねん狐きつねのこん助すけが

焼やいた魚さかなを取とりとしておしりに火ひがつき

きやんきやんきやん。」

笛ふえがピーと鳴なり幕まくは明あかるくなつて紺三郎こんざぶろうが又また出て来きて  
云いいました。

「みなさん。今晚こんばんの幻燈げんとうはこれでおしまいです。今夜こんやみな  
さんは深ふかく心こころに留とめなければならぬことがあります。そ  
れは狐きつねのこしらえたものを賢かしこいすこしも酔よわない人間にんげん  
のお子こさんが喰たべて下くだすつたという事ことです。そこでみなさ  
んはこれからも、大人おとなになつてもうそをつかはず人ひとをそねま  
ず私わたし共ども狐きつねの今迄いままでの悪わるい評判ひやうばんをすつかり無なくしてしま  
うだろうと思おもいます。閉会へいかいの辞じです。」

狐きつねの生徒せいとはみんな感動かんどうして  
両手りょうてをあげたりワーツと立たちあが  
りました。そしてキラキラ涙なみだをこ  
ぼしたのです。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

紺三郎こんざぶろうが二人ふたりの前まえに来て、丁寧ていねいにおじぎをして云いいました。

「それでは。さようなら。今夜こんやのご恩おんは決して忘わすれません。」

二人ふたりもおじぎをしてうちの方ほうへ帰かえりました。狐きつねの生徒せいと

たちが追おいかけて来て二人ふたりのふところやかくしにどんぐり

だの栗くりだの青あおびかりの石いしだのを入いれて、

「そら、あげますよ。」「そら、取とって下ください。」なんて云い

って風かぜの様ように逃にげ帰かえって行いきます。

紺三郎こんざぶろうは笑わらって見みていました。

二人ふたりは森もりを出でて野原のはらを行いきました。

その青白あおしろい雪ゆきの野原のはらのまん中なかで三人さんにんの黒くろい影かげが向むこうか  
ら来るくのを見みました。それは迎むかいに来きた兄にいさん達たちでした。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒